

不確実性下における経済成長

国際商経学部 坪井 美都紀



キーワード

経済成長、不確実性、人的資本、技術進歩

研究概要

90年代におけるバブル崩壊後、日本経済は停滞しています。例えば、2000年からパンデミック前の2019年までの20年間における平均経済成長率は0.34%であり、また直近(2024年度)の前年度比の実質経済成長率も0.8%と、1%にも満たない状況が続いています。20世紀には経済成長率が10%以上であった時期もあることを踏まえれば、近年いかに日本の経済成長が鈍化してきたかが分かります。

20世紀の経済成長に関する研究の蓄積により、経済成長の源泉は物的資本と人的資本の蓄積、そして技術の進歩であることが分かっています。しかし、21世紀に入ってから「経済成長を促進する要因」よりも「経済成長を阻害する要因」についての研究が増えてきました。そうした経済成長の阻害要因としては、少子高齢化、気候変動、金融市場における摩擦、資源の不適切な配分などが指摘されており、それらに関する理論的かつ実証的な研究の蓄積が進んでいます。一方、私の研究では、2008年の世界金融危機や2020年のパンデミックといった、短期的かつ突発的な負のショックが経済成長に与える影響を、人的資本の蓄積ないしは技術の進歩が経済成長の源泉となるモデルを用いて考察しています。

アピールポイント

不確実性が存在する下での動学分析は非常に困難ですが、私の研究では解析的な考察に注力することで、分析結果の含意と直感がとりやすい手法を追求しています。その結果「常識」と思われがちなのが必ずしも「常識」とは言えない可能性も明示的に示しています。一例として、不確実性の程度が小さい限りにおいては、その上昇がかえって経済成長を促進する可能性がある、という研究結果を得ています。

応用分野

私たちは、AIの台頭やオートメーションに伴う技術進歩に関する不確実性、突発的な相互関税の表明のような国際貿易に関する不確実性、感染症の伝播がもたらす不確実性など、常に不確実性と隣り合わせで生きねばならない時代におり、私の研究はそれらと密接に関連しています。